

(様式第1号)

研究No.
(記載不要)

19-文学-8

平成19年度配分 研究成果の概要

研究名	英米大学との国際交流				
配分を受けた特別研究費	文化政策学部長特別研究費				1400 千円
研究者氏名 (代表者)	学部名 (研究科名)	学科名	職	氏名	共同研究の 場合の分担
	文化政策学部	国際文化学科	教授	鈴木 元子	国際文化学科に関わ る分野を担当
共同 研究 者	文化政策学部	文化政策学科	教授	森 俊太	文化政策学科との国 際交流に関わる分野
	文化政策学部	芸術文化学科	講師	中尾 知彦	アート・マネジメント教 育に関する分野
発表の方法	1. 紀 要 『静岡文化芸術大学研究紀要』 「ウェールズ大学トリニティ・カレッジ調査報 告および交流に向けての提言」			号 数	第 8 号 (20年 3月発行) (53 頁～67 頁)
	2 学会等での発表 学会等名:			発表日 (発表 予定日)	平成 年 月 日
	3 その他 発表の方法: ①第1回学内研究会 ②第2回学内研究会 ③平成 19 年度第4回国際交流委員会で 報告 ④平成 19 年度第 5 回国際交流委員会で 報告 ⑤国際文化学科の学科会議で報告			発表日	① H19年 7月 27日 ② H19年 9月 19日 ③ H19年 10月 4日 ④ H19年 11月 15日 ⑤ H19年 10月 11日

注:配分を受けた翌年度の6月末までに提出

(研究の目的等)

【鈴木】日本の大学では、海外の一流大学との学術国際交流(及び連携、提携)が叫ばれている昨今である。今回の研究においては、本学の国際交流候補大学であるイギリスのウェールズ大学トリニティ・カレッジ・カマーゼンとどのような交流をすべきか、具体的には、学生の留学や語学研修先としてどのような交流のあり方が可能かを、国際文化学科の立場から研究し、提案することを目的とした。

【森】ウェールズ大学トリニティ・カレッジ・カマーゼンの教育・研究内容やカリキュラムについて、事前及び現地調査を行い、本学文化政策学科との国際交流に関する、具体的な提案をすることを目的とした。

【中尾】本学は日本においてアーツ・マネジメントが学べる数少ない大学のひとつである。しかし、本学のプログラムの教育内容は国際的なスタンダードとはやや異なったものとなっているように思われる。ウェールズ大学トリニティ・カレッジ・カマーゼンのアーツ・マネジメント・プログラムの教育内容を調査し、最も発展しカリキュラムの標準化が進んでいるアメリカの大学のプログラムと比較すると同時に、本学のアーツ・マネジメント教育の再検討をして今後の交流等についての方向性を提案した。

(研究の実施方法等)

【鈴木】

- ① 大学における国際交流について研究した書物や、イギリス、ウェールズに関する書籍から学術的情報を収集した。
- ② 平成19年9月21日から30日までウェールズ大学トリニティ・カレッジ・カマーゼンに視察調査に行き、トリニティの学長はじめ上層部の方々、学部長たちや学科長たちと面談して意見交換をし、交流を深めた。キャンパスの施設・設備等の見学、参考資料の収集、写真撮影等をした。長期に留学する場合のモデル例について、日本人留学生に会い、学生寮をみせてもらい、聞き取り調査をした。大学の歴史や教育内容、大学近辺の環境、カマーゼン市やカーディフ市も視察した。
- ③ 研究報告を執筆して、大学の紀要に投稿した。
- ④ 国際交流委員会と、国際文化学科で報告した。
- ⑤ ゼミの授業や、「英米文学史」の授業の中で、ウェールズ大学トリニティ・カレッジ・カマーゼンや、ウェールズ出身の詩人ディラン・トマスについて紹介した。

【森】

- ① ウェールズ大学トリニティ・カレッジ・カマーゼンについて、ホームページや東京のブリティッシュ・カウンシルの資料室にある書籍などにより情報収集し、大学の概要やカリキュラム、立地環境などについて調査した。
- ② 平成19年9月11日から16日まで、ウェールズ大学トリニティ・カレッジ・カマーゼンに視察調査に行き、学長、経営担当副学長、関連する学科長や施設関係者と面談して、意見交換をした。キャンパス施設、設備の見学、参考資料の収集も行った。
- ③ 帰国後、英国ウェールズ大学のトリニティ・カレッジ・カマーゼンと文化政策学科との交流の可能性について、報告書を執筆し、本学紀要に投稿した。主な内容としては、「観光学」(Tourism)と「青少年と地域活動」(Youth and Community Work)などが、文化政策学科との接点となる可能性があることを指摘した。
- ④ 国際交流委員会にて、紀要に投稿した内容の概要報告をした。

【中尾】

- ① アーツ・マネジメントのカリキュラムについて、英米のプログラムを中心として、書籍、ウェブサイト等でレビューした。
- ② ウェールズ大学トリニティ・カレッジ・カマーゼンについては、Eメールで事前調査をし、シラバス等の資料を入手し、精査した。
- ③ 9月21日～30日まで英国を訪れ、トリニティ・カレッジ・カマーゼンのアーツ・マネジメント担当教員、学長、各学科長等にインタビュー、意見交換、見学をした。
- ④ 国際交流委員会にて概要を発表し、2008年3月発行の本学紀要(vol.8)にて報告した。紀要では、アメリカのカリキュラムの標準的内容と、トリニティ・カレッジ・カマーゼンのカリキュラムの特長を紹介した上で、日本においてはびこっているアーツ・マネジメントの俗説や問題点を指摘し、本学とトリニティ・カレッジ・カマーゼンが交流をする上での問題点を具体的に提案した。帰国後にも資料収集を継続した。

(得られた成果等)

- ① 第1回学内研究会 (H19年7月27日)
- ② 第2回学内研究会 (H19年9月19日)
- ③ 平成19年度第4回国際交流委員会で報告 (H19年10月4日)
- ④ 平成19年度第5回国際交流委員会で報告 (H19年11月15日)
- ⑤ 国際文化学科の学科会議で報告 (H19年10月11日)
- ⑥ 『静岡文化芸術大学研究紀要』(第8号、H20年3月発行)に研究報告書
「ウェールズ大学トリニティ・カレッジ調査報告および交流に向けての提言」(53頁～67頁)